

西内啓著『統計学が最強の学問である』ダイヤモンド社（2013年）

労働組合の活動に欠かせないものの一つとして“調査”がある。組合員の生活を把握し、意識を掴み、働き方の現状まで明らかにする。この“調査”から得られたデータをもとに、各種の組合活動が展開されていくこととなり、まさに「調査なくして活動なし」である。そして、その調査データの分析には統計学が大きく関わってくる。

本著は、オーバーかもしれないが、統計学を最強の学問として位置付け、その重要性を述べていくものである。とりわけ、最近のIT化の流れによって、データの収集を効率的にできるようになってきているため、統計学の重要性はさらに増してきているとも指摘している。

何をもって最強の学問としたのかという“根拠”を一言でいえば、「統計学は理論や経験からの知見ではない、数値という絶対的な事実を確認でき、それによる因果関係を導くことができる学問だから」ということになる。ビジネスシーンに置き換えると、一般的に効果があるといわれる施策の導入や上司の昔の経験則といった、当事者にとっては明確な根拠のないことを、統計学であれば数値で示すことができるという。さらには、この数値といういわば絶対的な指標をもつことで、結論の出ない延々と続く会議なども減らすことが可能になるという。

ただし、数値を絶対指標とするためには、データをランダム化して検討することの必要性が述べられている。当然のことではあるが、少数の特定の数値だけで、主観的に判断することは、全体を推計する統計とはいえないということであり、このランダム化は4～5章の2章にわたって詳しく検討されている。

そして、ランダム化以外にも、データ分析の方法として回帰分析などに関する事例もあげるなど、全体的に統計学をビジネスにどのように応用するのかという視点から検討が加えられている。さらに、最近のバズワードである“ビッグデータ”についても、統計的な考え方をもとに冷静な解説がされており、コスト的な面も含めたサンプリングの重要性の指摘と事例の紹介などは、これから仕事に統計を取り入れていきたいという人には非常に有用であろう。（20,000人にアンケートをしても、2,000人にアンケートをしても、サンプリングがしっかりしていれば誤差は1%程度しかない。）

本著の特徴の一つは、ビジネス書として読みやすさを考えているせいか、難しい数式がまったくといっていいほど出てこないことである。そのため、専門的な数学の知識がなくても読めるものとなっている。ただし、ある程度統計に関する知識のある人については、物足りなさを感じる部分が多い。内容が多岐にわたることから個々の分析や手法への説明が詳しくされておらず、実際には他の統計学の専門書も合わせてみていくことになる。

それでも、「なぜ統計を考える必要があるのか、その重要性は何か」といった基礎部分への答えは示されていると思うので、統計学の入口を覗くつもりで手にとってみてはいかがだろうか。

（加藤健志）